

日本女性史考

著者	織田 泰之
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	21
ページ	25-35
発行年	1987
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001786/

日本女性史考

A Study in Women's History of Japan

織 田 泰 之

Yasuyuki ODA

I は じ め に

初等教育学科1年目学生の必修科目「社会」を担当するにあたって、何を、どのようにとりあげ講義を進めるか、しばらく迷いがあった。戦後、小、中、高等学校に、教科として社会科が誕生し、今ではすっかり教科としての市民権を得ているのを誰も疑わない。しかし社会科という教科は、伝統的な学問体系の中では、人文科学、社会科学の各分野をすべてこの中に含めた総合的な科目であり、さらにまた、戦後においては、一つの新たな社会創造の意欲をこめた「民主主義社会の建設」教科でもあった。

しかし、これらすべてを、15単位時間の中にもりこむことは不可能であり、また2年目に設けられている「教材研究・社会」との関連からも、独自の講義構成を考えてもよいのではないかという事で、特に近年、日本の社会における女性の地位の問題がとりあげられていることを手がかりに、日本女性史を、学生と共に考えてみようとしたのである。

具体的には、古代、中世、近世、近代、現代にわけて、それぞれの時代に生きる何人かの女性をとりあげ、その女性達が置かれた時代背景や、日本という風土がつくり出してきた様々な問題点を、女性として、妻として、母として、また一人の職業人としてといった観点から考えてみようとしたのである。

最終的に、講義が終る直前、夏休みの課題として、各自、日本女性史の中で興味をもち、または尊敬する女性を、さらに、現実に実在する女性、乃至は、文学作品の中にみられる女性でもよいという条件で、レポートを提出してもらったのである。

対象学生は、昭和59年度、昭和60年度、昭和61年度入学の、総計432名である。

II 講義方法および内容

1. 講義方法

講義はもっぱら、教授者の作成したノートを、学生が筆記し、また時には質問や、討議を加えるといった方法をとった。

またとりあげたのは次の女性達である。

表1 講義でとりあげた女性達

	古 代	中 世	近 世	近 ・ 現 代
昭和 59 年度	額 田 姫 王	日 野 富 子	信玄夫人「由布姫」	円地文子作「女坂の倫」
昭和 60 年度	額 田 姫 王	日 野 富 子	信玄夫人「由布姫」	皇女和宮 女坂の倫
昭和 61 年度	額 田 姫 王	日 野 富 子	信玄夫人「由布姫」	皇女和宮 女坂の倫

以上とりあげた女性は全部で5名である。それぞれの女性について、簡単に時代と、どのような人物であったかをのべておきたいと思う。

2. 内 容

(1) 額田姫王

日本書紀の、天武天皇の条に、「天皇、^{かがみのおおきみ}初め鏡王の女^{むすめかたのおおきみ}額田姫王を娶して、^め十市皇女を生む」と一行にみたぬ記事があるのみであるが、彼女の名前は万葉歌人としてつとに有名である。日本の古代国家形成の渦中であって、はじめ大海人皇子（天武天皇）の妻となり、のちに中大兄皇子（天智天皇）に召され、近江期の宮廷歌人として活躍したことが知られている。

しかし、彼女の身分や職掌についても色々な説があってはっきりしていない。ただ大海人皇子との間でかわされたという歌を紹介するにとどめたい。

額田姫王

あかねさす ^{むらさきの}紫 野行き ^{しめの}標野行き
野守は見ずや 君が袖振る

大海人皇子

^{むらさき}紫草の にほへる妹を 憎くあらば
人妻故に 我恋ひめやも

この二人の間にかわされた恋歌を手がかりに、古代における一人の女性の人間的な明るさやおおらかさ、さらに女性の教養の高さなどを考えてみたかったのである。

(2) 日野富子

室町時代というのは、日本における政治史の中でなにか捉えどころのない時代である。源頼朝によってはじめられた武家政権につながる中で考えられるはずであるのに、必ずしも武力のみが支配権力としてみえてこない時代ということができるのではなかろうか。

そのような中に、日野富子は、足利8代將軍義政の妻としてこの時代を生きることになる。

彼女は義政の子義尚（9代將軍）を生む。この義尚を將軍にする為の彼女の活躍が、後世利殖に長けた女性という風聞を生み、さらにまた義尚を將軍につける為の戦争、応仁の乱がひき起こされたことにつながるのである。

武士社会における女性の地位は、いつでも低く、大抵の場合、男達の権力欲の犠牲になるのが通例であるが、室町時代という政治的にあいまいな時代であったからか、日野富子の生きかたは女性史を考えるうえで大変興味のある人物である。

(3) 由布姫

戦国時代の女性として由布姫をえらんだのは、男性社会そのものである戦国の世において、彼女のしたたかな生きかたに、日本女性のかくされいる部分をみるおもしろいからである。というのは、由布姫とは、日本史の多くのは、武田信玄の側室で、信玄に攻略された諏訪頼重の娘であり、信玄を継いだ武田勝頼の母としか記していない。

由布姫という名前も、そしてその生き方も、講義にとりあげた内容も、井上靖の小説、「風林火山」をよりどころとした。

親子兄弟さらに人質として敵に与える女、子ども、すべて非情な力の論理で処理されなければならなかった時代において、幼なく、そして力弱い女性が生きのび、またいささかなりとも自己主張を通そうとすれば、あえて父の敵である武田信玄に身をまかせ、そして二人の間に生れた子勝頼を、信玄の多くの妻妾の子どもたちからぬきんでて後継者とした生きざまの中に由布姫の女性でしかなし得ない、男性社会をはるかに超えたすさまじい生き方をみるのである。

(4) 皇女和宮

時代の大きな転換は、どんな人間にとっても、強弱、深淺の差はあれ運命を変えるものであることは、洋の東西を問わず、また男女にも関わりなく訪れるものである。

日本史の中で、徳川武家政権がまさに終りを迎えようとする文久元年（1861）時の孝明天皇の妹（異母妹）皇女和宮は、自ら不本意な思いを抱いて徳川14代將軍家茂の妻として京都から江戸に嫁いだのであった。この背景には、佐幕と尊皇、開国と攘夷といった荒れ狂う状況が全国を覆い、尊皇勢力への弾圧、これに対する反動として桜田門外の変をひきおこすという、まさに国内は疾風怒涛の渦があらくる時代であった。

このあらしを治める為の人身御供として登場することになったのが皇女和宮であった。やはりここでも女性は時代の犠牲を強いられる対象でしかなかった。15才まで、幼ない頃に決められていたとはいえ、有栖川宮^{たるひと}熾仁親王との婚約をおそらく信じて疑わず、当時の宮廷における常識に安住していたであろう和宮の上に、突如として全人生をくつがえす程の運命が見舞ったのであった。

すみなれし 都路出て 今日幾日

いそぐもつらき あづま路の旅

この歌は、皇女和宮が京都から江戸へ、降嫁の道中に詠まれた歌であるという。

(5) 円地文子の作品「女坂」より

この作品は文学書であって歴史書ではない。さらにまた、この「女坂」のヒロインもフィクションであろう。しかし後世に名をとどめることのない、無名の女性が、時代と、日本という風土の中にいかに生きたかを物語ってくれるという点で、殊に明治初期の1人の妻のこの女主人公^{みち}「倫」の生きざまは、女性史を考えるうえで大変貴重な作品であることに間違いはない。

自由民権運動がはげしくなりはじめた頃、すなわち明治10年代の半ば、福島県の鬼県令の部下として、自由民権運動を弾圧していた白川大書記官の妻「倫」がこの作品の女主人公である。

倫は、夫の妾さがしを当の夫から命ぜられ、その命に従って、幼ない娘をともなつて東京に

出かけるのである。そして、選んだのは「顔形だけ派出で水々しく、心持の沈んだおずおずした娘」を選ぶのである。そして夫の世話をするこの女性、須賀に、内心で嫉妬の炎をもやししながら、完璧に倫の理想どおりの妾として教育したのであった。

さらに夫は、妻の選んだ妾の外に、自分の小間使を犯し、あまつさえ長男の嫁とも不倫の関係を結ぶのであった。そんな中で、倫は明治の女性として、多分に徳川期の封建的な遺産を全身で受け止め、一家の生活を微動だにさせない主婦としての生きざまをみせるのであった。

円地文子は、「私は明治時代の家庭を背景にして、封建制を多分に持ったまま安易な亭主閑白の座に坐り通して生きた1人の男と、知的な芽を内にはらんだ彼の妻との間のたたかきを描いてみたかったのである」と、角川新書版のあとがきに書いている。

私達がこの作品を通して、さらにまた私達が生きている現代の目で、この作品を理解しようとしてみても、学生達ばかりでなく、私でさえ想像を絶する女性の生きざまである。

3. 前記の女性達をとりあげた理由

以上の講義でとりあげた女性は、どんな理由でとりあげたのかという点についてもふれておきたいと思う。

日本史に限定したのは、学生達が本学の図書館等で簡単に手にとることが出来るという点にあり、さらにまた文学作品も加えた点については、作者の現在の目や心が働いているとはいえ、歴史書以上に、現在の私達の心にふれて、それぞれの時代に生きる心映えや、女性の生きざまを具体的に受けとることが出来ると考えたからであった。さらにまた、理論的な歴史書よりは、物語り風の歴史、人物史といったものが、学生達に親しみを持って読むことができ、考えてもらえると思ったからでもあった。

Ⅲ 学生たちのとりあげた女性たち

提出されたレポートは、3ヶ年で432編、したがって、学生数は432名である。これらの学生達のとりあげた女性の数は約150名におよび、また、特に日本の女性に限ったこともあって、学生の中で外国の女性をとりあげた者は上記の学生数から除いてある。

特に面白いと思ったのは、自分の母親や祖母をとりあげ、時代の中での生きざまを述べ、これに対する自分との関わりと、どう生きるかについてのレポートが、毎年必ず2、3編あったことである。

(1) とりあげられた女性達の時代区分

- 古代、中世から選んだ学生数（古代から室町幕府まで） 160名
- 近世から選んだ学生数（戦国時代から徳川幕府崩壊まで） 143名
- 近代、現代から選んだ学生数（明治維新から現在まで） 129名

(2) とりあげられた主な女性（各時代から多い順に3名）

- 古代、中世（北条政子 26/100, 紫式部 24/160, 額田王女 16/160）
- 近世（ガラシャ夫人 13/143, 北政所 ねね 13/143, 淀君 11/143）

。近代、現代（与謝野晶子 22/129, 樋口一葉 15/129, 平塚らいちよう 9/129）

この外 5 名以上の学生のあげた女性を列挙すると次のようになる。

卑弥呼, 持統女帝, 藤原薬子, 清少納言, 道綱の母, 静御前, 日野富子, お市の方, 於大の方, 春日局, 天理教教祖 中山みき, 唐人お吉, 福田英子, 石川節子, 松井須磨子, モルガンお雪, 壺井栄。

以上の外に, 毎年, 2, 3 名は, 自分の母や祖母をとりあげた者もあった。

(3) 学生が選んでとりあげた理由

レポート提出に際し, 何故その女性を選んだのかの理由もつけてもらったのである。それによると, 約半数に近い学生は, 中学, 高校時代を通じてあまり考えたことが無いと述べ, 課題を与えられて初めて, 図書館や, 私の研究室を訪ねて選んだとしている。

しかし, なかで面白いと思ったものに, 小学生の頃読んだ漫画の本からヒントを得たと言う者がいたことであった。また, テレビの影響も大きく, 特に歴史上のテレビドラマの影響を, かなりの数の学生達がここで選んだ動機としてあげていることである。テレビの教育的な意味の大きさを改めて感じさせられたのであった。

また文学上で知られている女性達, さらに政治や, 社会的な面で活躍した女性については多く高等学校時代の授業でと答えた者が多かった。

いずれにしても, 女性を歴史の中でとらえ, その生き方について考えるということは, 現代においてもまだ一般的には, それ程関心を持たれているということとはできないような気がするのである。

また, テレビドラマや映画, さらに若い女性達にとっても, 漫画といった媒体が相当大的な役割を果たしているようである。

以上の結果からみて, 我が国における歴史教育, 特に小学校や中学校で行なわれる人物史の不足を痛感せざるを得ないのである。

Ⅳ 学生のリポートから

3 ヶ年にわたるレポートの中から, 何編かとりあげて, 現代の女子学生達が時代の中で生きた女性達について, どのような捉え方をしているかをみてみたいと思う。

(1) 政権を動かした女たち

—悪女の虚像・藤原薬子—

昭和60年度生

参考文献 「人物日本の女性史 5」藤原薬子 杉本苑子著 集英社。

日本の女性史の中でも, ベスト5に入る悪女, 藤原薬子は, 気の毒なことにそんなレッテルを額に貼られてきた。

小学校 6 年生の時に初めて歴史の教科書を手にし, はっと目を引いたのは, この「藤原薬子の乱」であった。敵と味方に別れて争う行為を乱を呼び, 承久の乱, 応仁の乱, 将門の乱, 純友の乱, 大塩平八郎の乱の名称には年号や男性の名のつくものばかりだが, その中に女性の名

が印されている。いかにも、ものものしく、「恐ろしい女だったのではないか」という想像を持たせた。以来、学校の授業では、この乱について深くふれることはなかったが、いつかきつと実像をのぞいてみたいという興味は消えなかった。

薬子は、藤原式家の一族、種継の娘として生まれる。成長するにつれ、天成の美貌が輝きだした。母の名ははっきりしない。やがて同じ式家の藤原縄主と結婚し、3男2女をもうけ、家庭は円満そのものだった。しかし、子どもらが適齢期に達する頃、不幸が訪れる。時の天皇垣武帝の皇太子である^{あて}安殿親王が、薬子夫妻の長女を是非妃にと申し入れてきたのであった。もちろん、縄主はよろこんで娘を東宮へ送り込んだ。その付き添いでやってきた、母の薬子に安殿親王は夢中になり、いつまでも帰そうとはしなかった。

やがて皇太子は、平城天皇となり政権を掌握し、薬子もまた兄仲成とともに式家の権力を伸ばしてゆく。この頃の薬子はいじらしいほど懸命に、平城天皇に愛情を捧げるのであった。また、その芳しくないイメージをぬぐうべく、天皇に一生懸命につくすのである。

しかし運命は非情にも彼らにはほえむことはなかった。相次ぐ天災、根強い批判、帝の重病。がんばりつづけた帝も自分の息子を皇太子に立てるということを条件に、弟の神野親皇に位を譲り、自らは上皇となった。

こうして皇位についた嵯峨天皇は、その後も政治に口を出す上皇をうとみ、北家の藤原冬嗣と組み、策謀の末に起こったのが薬子の乱であった。この乱で薬子は敗れ、毒をあおぎ自害する。矛を交えるにも至らず、ぱっと燃え、ぱっと消えた火の手であった。

薬子には、才知も手腕も、そして潔よく身を処す胆力もあった。しかし、美点は故意に覆われ悪女とのみされてきた、勝者による史実の歪曲であろう。だが、夫の屈辱、娘の悲しみ、それらを踏みにじっても、なお価値ある恋だったろうか。それまでして、亡き大叔父や、父の志した式家興隆の幻影を追った執念、“女”としての魅力で、権力闘争の泥沼をたたかいぬくのは困難でもあり、危険でもあった。しかし、それしか手段はなかった。それゆえ、薬子の悲劇は生まれてしまったといえるのではないだろうか。

女としての“^{さが}性”をあらためて考えさせられる歴史上の人物であった。

(2) 「賢く強い女」 ^{ひと}清少納言

昭和59年度生

清少納言の祖先は、天武天皇にさかのぼる。父清原元輔も、歌人としては有名であった。幼い時から漢詩、漢文を父に学び、才智に長けたことで評判の彼女は、橘則光に嫁いで則長という一子を得たが、別れて中宮定子に仕えた。

定子は中関白家といわれた藤原道隆の娘で、四才年上の一条天皇の後宮に入った。当時は皇室の外戚になるために藤原氏の上層の貴族たちは争って娘を宮中に送り、その周辺に才学のある女房をあつめたのである。

定子もまた、才色兼備のすぐれた人であったが、清少納言の機智にあふれた対応も、多くの公卿たちの人気の的であった。

「枕草子」は宮中生活で見聞きしたことや、歌枕や備忘録のようなものをまとめたものであ

る。見聞きしたことの中でも、人の心の定めなさを、いちばん多く書きこみ、あえて逆境に挑んでゆくおもしろさを、風吹くおりの雨雲を仰ぐ心にたとえて、定子に示したのではないだろうか。世の中がつれなければつれない程、いよいよ生き長らえて、その刻々に変わる姿に打ち興じたいと思いませんか、と呼びかけてでもいるようである。

清少納言はつぶさに定子の生涯を見まもっていた。自分よりずっと年下であったけれど、そのすぐれた美貌だけでなく、才気ゆたかに、思いやりも深い定子が、こんな哀れな死にようであってよいのか。

「枕草子」は定子在世のうちから書きはじめられ、没後の翌年あたりに書きおわったであろうといわれているけれど、もっとも多い章、段には、定子のかしこさを伝えることに費やしている。また、定子の死後も、定子に敬愛をささげて生きる姿勢が見られる。

清少納言にとって、女の仕合せとはどういうところにあったのだろうか。

二四段に、「男によりそって、先々のことなどろくに考えず、男の思うままに生きていくようなのは、やはりやりきれない」と書いているが、この考え方は、千年もたった今でも通用するような女の生き方の一つの解釈である。平凡な生活に満足できず、ついに夫や子どもとも別れて宮仕えにでた清少納言は、今でいうキャリアウーマンとでもいおうか、賢く、またとても強い女^{ひと}だと思う。

美しさ、優雅さにあこがれた宮中ではあったが、実際のなんと醜い世界であることか。自分の栄誉や権力のためには、平気で策謀をこらし、ひとを裏切る。「枕草子」は自然の美しさをあげ、人の心の美しさをあげているが、一番語りかけたかったのは、この浮き世、この濁世をはなれての魂の安住の場はどこにあるかを、だれよりも、いとしい定子に告げたかったのではないだろうか。

(3) 井上 靖著「兵鼓」から

昭和61年度生

兵鼓は、以仁王の平家追討の令旨を受けた青年武将、木曾義仲に侍る武者姿の女性“巴”とその心情を、井上靖が文学作品として描いたものである。

すでに妻と義高という一子を持つ義仲に、兄妹のようにして育てられた中原兼遠の娘、巴は、義仲に強い思慕を抱きながら生長してきたのであった。義仲が兵を挙げて出陣する時にも、巴は周囲の反対を頑強に押し切ってその軍に従う。妻ではない巴が、こうすることによって義仲への愛情を表現するのである。しかも義仲には外にも女性は何人か居り、それらの女性との愛の確執の中で、次第に生命をかけて義仲と共に戦場で戦う決意を高めてゆくのであった。しかし、それは決して巴が他の男のように武芸に秀でているからというのではなく、巴にはこれより他に自分の義仲に対する心を表現する術がなかったからである。

作者、井上氏はこういった巴の姿に何を描こうとしたのだろうか。

愛の純粹さと潔癖さを胸に描き、暖めている巴。井上氏は「白い牙」という作品の中で、愛を「いつも自分が経験するように、心の内側からまんまんと満ち渡り、流動し、拡がって来るもの。どこまでもどこまでも優しく美しく膨らんで来るもの。限りなく香ぐわしい限りなく輝

かしいもの。」とそのヒロインに言わしめている。そして女武者巴は、このようなヒロインと同一線上にある女性像ではないかと思われる。

それは義仲の女性関係を許すことができないまま、それでも義仲と生死を共にすることによって、自分の義仲に対する愛情は育てていける筈だと決心をかためるところや、義仲の一子、義高を義仲の体の一部として愛するところなどから充分うなずくことができる。

しかし、私はここで素直に同意できない部分があることも否めない。義仲の関係した女性に嫉妬し、ついに義仲に対して鋭い嫌味を言う巴。私はこういった巴の哀しさというものが好きである。強く愛を感じれば感ずる程素直になれない部分といった不器用さも感ずるのだ。義仲の身体にふれることなく思慕の情を募らせていく所など、私の理想として尊敬の念さえ抱く。だからこそ私は、最後まで巴には義仲に抱かれて欲しくなかったのである。抱かれてしまった巴に私は同意できない失望を抱く。私個人としてはあくまで精神的な部分だけで巴には生きてほしかった。そうでなければ、他の女の性と同じ、哀しい女の性^{さが}だけに終わってしまうように思われるのである。しかしこれは、人生における経験の少ない者の言うわがままな理想かもしれない。それにしても女の仕合わせが、男に頼るところが大きいということに、おもしろくない感想を持つのは私だけなのだろうか。

(4) 「モルガンお雪」

昭和59年度生

この物語の主人公である、加藤ユキ、のちの、モルガンお雪は、明治14年11月7日出生と戸籍には書いてあるが、実際には同年8月7日に生まれた。

父は加藤平助、母はコト、ユキはその末っ子の四女である。父の平助は京都寺町六角下ルでかなり手広く刀剣商を営んでいた。だが明治3年の帯刀禁止令で商売が成り立たなくなり、店をたたんで、柳馬場五条に移り、金箔商を始めた。はじめのうちは召使も数人置き、上の娘たちを三味線や踊りなど稽古事に通わせる余裕のある暮らし向きだった。ユキの生まれる少し前に、何か商売上の失敗でもあったらしく、急に家が傾いた。それで引越したのが、近くの万寿寺通り高倉東入ルで、ユキはここで生まれている。その後家も転々としたが、明治27年、父平助は失意のうちに亡くなった。日清戦争の始まった年であった。

そんな中で、明治16年、長姉のウタが16才で祇園新地から芸者に出ている。4人姉妹の中でもっとも人目を引く容姿に恵まれていたが、逼迫した家の事情がやむなくさせたことであったのはいうまでもあるまい。

長姉とは14も年のはなれているユキは、元吉町の家から祇園石段下の第十五尋常小学校に通った。学業を終えたユキは、祇園の女紅場に通わされた。ここは、舞伎や将来芸妓になる者が、読み書き、行儀作法、歌舞音曲から茶の湯、生花まで身につけるところである。

ユキはごく自然に芸妓への道を進んだ。姉のウタがこの世界に入ったのは、ユキがまだ2つの時で、ユキは長姉の芸妓姿しか知らない。やがてつぎの姉スミもこれになった。ユキのすぐ上の姉のナヲも、祇園川端のお茶屋に仲居として奉行するようになったから、結局、4人姉妹がそろって花街に身を置いたことになる。

「姉さんのようになる」ということに、少女ユキは何の抵抗も感じなかった。芸妓姿の写真をみると、ユキはいわゆる瓜実顔で、細く長い眉、切れ長の目、そしてやや受け口のところなぞ古風ではあるが、どこか今でも通用する美人の要素をもっているように思われる。

もともと芸事が好きで、持ち前の負けん気で稽古事に励んだユキは、いつしか「胡弓のおゆき」と呼ばれて珍重されるようになっていく。

そんな彼女の前に登場したのが、ジョージ・デニソン・モルガンである。モルガンの熱心な誘いを強く断われなかった理由には二つの事があげられるという。

ひとつは、芸妓というユキの立場であった。そしてもうひとつは、モルガンがはずんでくれた「ぼち」の一部を、相愛の苦学生、川上俊介にひそかにみついでいたことである。芸妓の身である以上、客の前で、私には将来を約した人があるということは、おくびにも出せない。ユキは「その人と別れるのに4万円いる」と言い逃れた。がモルガンはその言葉を信じ、4万円で最愛の妻をえられるなら安いものだと思い承知してしまった。しかしこんごまかしはいつまでもつづくものではなかった。やがて川上俊介はユキに結婚を迫って、その不可能なことを知ると、彼女から逃げ去ってしまうのである。傷心の女心は、モルガンへと微妙に傾斜していった。彼女は、これ程まで自分を求めてくれる男なら何もかも——相手が異人であることも、嫁いでゆく先が海のかなたであることも——忘れてそのふところに飛びこんでゆくのが、女としての生きようではあるまいかと思いはじめた。もう22才になっていたユキには、異人、モルガンとの関係が世間にあからさまになった以上、もしもモルガンと別れたとしても、その後で、このことを承知の上での良縁などあるとは思われなかったのではなかろうか。

ユキがモルガンとの結婚を決意した段階で、彼女の側に明らかな愛の自覚があったとは、私にはどうしても思えない。彼女を動かしたのは、愛以前の決断でなかったのだろうか。愛以前の決断、それは女が自分の定めを知ることであろう。ユキは、自分自身にこう言い聞かせるのだった。

「あては、モルガンに妻としてもらわれたのや。もらわれた以上は、きっとだれにも負けんよい妻になる。どんな女にも負けんほど立派にモルガンに仕えてみせる」それはいかにも、負けん気の強いユキの誓いであった。悲しいまでの祇園の女の、そして明治の女の意地であった。その後のユキは、モルガンとアメリカへ渡るが、すぐ世界一周の旅に出る。パリを永住の地として幸せの絶頂であったユキに、モルガンの死という大きな悲しみが訪れる。

以上、明治の女性ユキ、祇園という境遇の中で、結婚という女性にとって、人生のすべてともいえる運命を、ひたすら受け身で捉えて来たとされる姿に、時代というだけでは説明されつくされない何かを感じるのである。(小坂井 澄著、「モルガンお雪」集英社刊)

(5) 私の母

昭和61年度生

私の母は、3才の時満州から引きあげて北海道に足をふみ入れた。戦後40年、日本の敗北は、人、ひとりの人生の大きすぎる分岐点であり、つらすぎる試練であった。

戦場に召集された祖父の留守を守り、祖母と母を含む子ども5人の小さな家に、ある夜、突

然、かまや、なたを持った満州人がおそって来たと言う。夜逃げ同然、とる物もとりあえず家族6人、日本行きの船へと足を急がせたそうだ。だが、船へとむかう長い道のりの中で、兄弟は5人から3人へと減っていった。すぐ上の姉と、すぐ下の弟は「餓死した」ときかされたと言う。それ以上祖母は口にしなかったらしい。しかし形見になるようなものは何ひとつなかったようである。「もしや」の願いをこめて、母は中国残留孤児の肉親捜しのテレビにかじりついて観ている。戦争は、まだ終わっていないのだ。

そんな母の母親（祖母）が死に、すぐ上の兄が死に、死と背中あわせで海を渡った最後の肉親の一人であった兄と言う人は、3才だった母を、「このまゝでは、死んでしまう。いっそ預けては」という声に激怒し、右手に持っていた米袋を投げ、その右手で母をかゝえ、何百キロの道を歩いてくれた人であった。人間が体を張って守るものとは何でしょうか。一番大切にしなければならないものとは何でしょう。「命」とは自分一人で育むことの出来ないものだと思う。それを支え、育てるのには、大きな力が必要であると思う。

母は今、へき地保育所で保母をしている。貧しかった家で、なんとか高校を出、就職し、結婚したけれど、保母の夢はすてきれず、私が小学校に入学し、妹が保育所に入った年、独学で保母試験を受け、3年がかりで資格をとったと言う。母は保母になる為に生まれてきたような人である。限りない努力と向学心、並大抵でない根性と底ぬけの明るさは、限界をみた者のみもっているのではないかと思われる、スケールの大きさを感じるのである。

また母は、私を生む時、ただの一言も「痛い」とか、「苦しい」と口にしなかったと言う。病院始まって以来、こんな強い人は始めてだと言われたそうである。

おそらく、引揚者の家の子として40年を生きて来た母には、どんな苦しいことがあったのか、またどんな願いがあったのか私にはくわしいことはわからない。しかし戦争を直接知らない私にとって、母の中に生きている戦後の苦難が、私の中に何かを与えてくれている事を痛感する。

保母として生きる母の姿の中に、このような時代に生まれ、その中で懸命に生きるすばらしい生きかたが、私にもまた教育の道を志す動機となっているのである。

V む す び

以上学生達の女性史の代表的なレポートをとりあげたが、共通している点をあげると次のようにまとめることができるように思う。

- ① 歴史的な時代背景の分析よりも、そこに生きた女性の心情に焦点をあてている事
- ② 常に今生きている自分と比較するという観点が強い事
- ③ 「愛」という視点を強く意識し、男性との関係の中で捉えざるを得ないことの強調。

以上の点については、もう少し解説を加える必要があるだろう。講義で常に強調した点は、われわれ人間は、多かれ、少なかれ時代の子であると言う事であった。それが男性であれ、女性であれ、時代を超えて生きる事は不可能で、中に天才とか、偉人と呼ばれる人が時代を超えて生

きょうとして、挫折していった歴史を学んで来たはずであった。

したがって、歴史の中に、女性に視点をあてて観る場合にも、まず時代をしっかり捉え、その上で女性としての生きかたを観るという事に力を入れたつもりである。

しかし、もともと歴史学や、日本史学の専攻者でもなく、さらに研究歴のない私が、たまたま、教師になろうとする学生達に、一般教養的な立場で、女性史を共に勉強してみようとしたひとつの試みであった事を前提にして、以上の小論をまとめてみたのである。それだけに、私の多分に主観的な心情が学生達に伝わって、提出されたレポートは大部分が歴史的な観点よりは、現在の自分とひきくらべた立場で書くという方向が強くなったように思う。今後の講義には、以上の点に反省を加えながら取り組んでみたいと考えている。

参 考 文 献

- 1) 井上光貞：日本書紀，中央公論社，1983
- 2) 西岡虎之助：日本女性史考，新評論社，1983
- 3) 桜井正信編：新日本女性史，有峰書店，1979
- 4) 佐藤京諄：女帝と皇位継承法，東京大学出版会，1985
- 5) 永井路子：歴史をさわがせた女たち，文芸春秋社，1978
- 6) 永井路子：樋口一葉，集英社，1978
- 7) 井上 靖：額田女王，新潮社，1972
- 8) 井上 靖：風林火山，新潮社，1983
- 9) 円地文子：女 坂，角川書店，1962
- 10) その他学生が買いやすい文庫本で，女性にかかわる歴史小説，歴史物語等多数。

(1987・9・18)